

小学校における語彙指導の方法論的研究 —学習国語辞典との関わりについて—

貴舟 良子(木曾郡南木曾町立読書小学校)

1 はじめに

以前、学習国語辞典と実際に使われている国語教科書の辞書学習について、比較考察する機会があった。そこで私には一つの疑問が残った。それは、辞書がどれほど引きやすくなったとしても、一番大切なことは、子供たちが辞書を使って学習することによってどれほど自分の中にその語彙を位置づけていけるかということではないか、という疑問である。

私が実際に受けていた授業は、分からない語句が出てくると辞書でその語句を引き、辞書に載っていることをそのままノートに書き写すという授業だった。しかしそのような学習では、子供たちにとって語句はその辞書に載っている語句としての意味しか持たなくなってしまうのではないだろうか、今になって思う。果たして子供たちには、1つの文中にその語句が使用されていることの意味が伝わっているのだろうか。文脈に沿うことや、作者がどのような意味を込めてその語句を使ったのかということまで考えた時、どのような語彙指導が望ましいのかを明らかにしたいというのが本論の目的である。

あわせて、語彙指導がなぜ行われなければならないのかということも、語彙指導の定義も含めて述べていく。

2 語彙指導の目的

語彙指導の目的の一つには語彙量の拡充があげられている。私もそれが一番の目的であると考え。しかし、語彙量を増やすことだけに語彙指導が偏りがちになっているのではないかという不安がある。

言葉を数多く知っていることは大切なことであるが、『国語教育研究大辞典』には「①文章を読んだり話を聞いたりしたときに、そこに使われている言葉を的確に、そして、イメージ豊かに理解できる力」を身につけることが語彙指導の一環であると書かれている。ここで使われている「イメージ豊かに理解できる力」というのは、その文脈にあった語彙の意味をイメージして選び、使用することができるということである。ただ語彙の意味を知っているというだけでなく、いくつかの意味の中から文脈に一番合ったものを選び出す力というものを語彙教育でつけていかなければならないのである。

語のイメージに関しては、『日本語百科大辞典』(p.384)に、次のように書かれている。「一般に単語のレベルでのイメージは単一的・個別的だが、文(文章)のレベルでのイメージは連続的・集合的で、個別的な各単語によるイメージを含みながら、全体として、今示したように場面イメージ・情景イメージを形成する。」ここから、やはり単語は文章の中で使われてはじめて生きてくるものであり、文章での使われ方によって単語としての意味が様々に変化すること、語彙指導を行ってゆく上で子供たちに一番指導していきたいところである。

「語彙指導」というと、語彙量を増やすことが一番の目的であるように思っていたが、やはり語彙量が増えても、それを使うことができなければ意味はないのである。以上のことから、語彙の意味を知ることだけでなく、「語彙の意味を知った上で、その語彙を生かせる使い方が出来るようにする」ということが語彙指導の目的であると言える。

2.2 語彙指導の現状

現在、語彙指導は学校教育においてどのように取り扱われているのかということも、学習指導要領、国語教科書の記述から考えていきたい。特に本論では語彙指導と学習国語辞典とのかかわりについて述べていくので、辞書学習に焦点を絞って見ていくことにする。

学習指導要領は新学習指導要領を用い、語彙指導の中で辞書学習がどのように扱われているの

かということを見ていく。国語教科書では、小学校4年生の教科書にはじめて「国語辞典の使い方」が記述されているので、その部分を抜粋しながら見ていく。

2.3 学習指導要領

学習指導要領は平成10年12月告示の『小学校学習指導要領』（以後学習指導要領とする）を使用する。その中で「辞書」という記述があるものだけ抜粋する（下線は筆者）。

〔第3学年及び第4学年〕

2 内容〔言語事項〕(1) エ 語句に関する事項

(イ) 表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解すること。

〔第5学年及び第6学年〕

2 内容〔言語事項〕(1) ウ 語句に関する事項

(イ) 表現したり理解したりするために必要な語句について、辞書を利用して調べる習慣を付けること。

『小学校学習指導要領解説 国語編』（以後学習指導要領解説とする）

〔(イ)の事項は、辞書利用に関するものである。第3学年及び第4学年における『辞書を利用して調べる方法を理解すること』は、第5学年及び第6学年における『辞書を利用して調べる習慣を付けること』へと発展する。『辞書を利用して調べる方法を理解すること』は、これまでは第4学年からの指導事項であったが、今回の改訂により第3学年から指導することとした。それは、読書範囲の広がりに応じて自分で難語句を調べたり、学校図書館を利用して必要な情報を収集・活用したりする能力を育成するためである。〕

〔(ウ)の辞書に関する事項は、第3学年及び第4学年での『辞書を利用して調べる方法を理解する』指導を受けて積極的に『辞書を利用して調べる習慣を付ける』ことをねらっている。例えば、『C読むこと』の領域の言語活動例の『自分の課題を解決するために図鑑や辞典などを活用して必要な情報を読むこと』を通し、『オ 必要な情報を得るために、効果的な読み方を工夫すること。』と関係付ける工夫も必要である。〕

また、日常生活において辞書を活用して調べる習慣が定着するようにするため、国語科に限らず他の教科等の調べる学習や日常生活の中でも積極的に辞書を利用できるよう、必要なときはいつでも辞書が手元にあり使えるよう配慮しておくことが大切である。〕

このように、学習指導要領においては第3学年及び第4学年、第5学年及び第6学年に辞書が具体的に取り上げられて書かれている。このことから、語彙量の拡充とそこで習得した語彙を生かしながら使えるようになるという、語彙指導の目的が学習指導要領に位置づけられていることが分かる。

2.4 国語教科書

今回は長野県で使用されている光村図書の国語教科書を使用する。

学習指導要領書では第3学年から辞書学習を取り入れるようにと書かれているが、教科書では第4学年の教科書に初めて辞書の引き方が載っているため、その部分を抜粋する。

国語四上 かがやき 光村図書

国語辞典の使い方

国語辞典は、言葉の意味や使い方を調べたり、漢字ではどのように書くのかを調べたりするときに使います。

五十音順に

国語辞典では、言葉は、下の図のように、消音のかなで五十音順にならべてあります。
(五十音順の表)

例えば、「春(はる)」という言葉を引きいてみましょう。まず、「はる」の「は」をさがします。「ぬ」「ね」「の」の後です。次に、二字目の「る」をさがします。これも、「はら」「はり」「はる」と五十音順に配列してあります。こうして見ていくと、「はる」が見つかります。

濁音(「ばびぶべぼ」など)、半濁音(「ばびぶべぼ」)は、消音(「はひふへほ」など)の後に、濁音、半濁音の順にならべてあります。

言い切りの形で

「焼かない」「焼きます」「焼いた」「焼けば」「焼こう」などと形が変わる言葉は、ふつう、次の例のように、「焼く」という言い切りの形で出ています。

やく【焼く】①火をつけてもやす。②火に当てる。③火のねつを加えて物を作る。④日の光にはだを当てる。

やぐ【夜具】ねるときに使う、ふとん

どの意味が当てはまるか

調べようとする言葉が、どの意味に当てはまるか(「焼く」の例では、①から④のうち、どれか)を考える必要があります。

辞書を使う目的として教科書に定められている事柄を次のようにまとめる

1 言葉の意味や使い方を調べたいとき

2 漢字でどう書くのか(送りがなはどうするのか) 調べたいとき

本論で取り扱った光村図書の教科書では、「国語辞典の使い方」というページが2ページある。そこでは、五十音順の説明、辞書の基本的な引き方、引くときの言葉の形、意味の選別の仕方の説明がされている。

本論で最も注目して取り上げていきたいと考えている部分は、教科書の最後に記述されている「どの意味が当てはまるか」という項目である。

2.5 語彙指導の問題点

いままで語彙指導の目的、現状などについて文献から調べてきたが、そこから考えられる問題点を指摘していきたい。

まず『学習指導要領』では、語彙指導における辞書指導は3~6年を通していても、すべて「調べる習慣を理解したり、身につけたりするために行われる」と記述されている。国語編には「読むこと」と関連づけるようにと記述されているが、文章読解においてどのように語彙指導を位置づけてゆくのかということが『学習指導要領』には具体的に述べられていない。また『学習指導要領』を見ても、指導方針として「読書範囲の広がりに応じて自分で難語句を調べたり、学校図書館を利用して必要な情報を収集・活用したりする能力を育成するためである。」と書かれており、どちらかというとも語句をしらべることに重点をおいているようだ。

次に『国語教科書』においては「国語辞典の使い方」という項目で、「どの意味が当てはまるか」という見出しを立てて次のように述べている。

「調べようとする言葉が、どの意味に当てはまるか考える必要があります。」しかし、これだけの説明では児童に内容が深く伝わらないのではないだろうか。このような教科書の記述からも、語彙指導と文章読解を強く結びつける指導に関心が薄いような気がする。辞書の引き方は詳しく説明されているので良い。しかし、語彙を調べて多くの意味を知ることの他に、増やしたそれらの知識をどのように活用していくのかということはほとんど述べられていない。小学校4年生で

初めて辞書学習を行うので、辞書の引き方を理解することは必要だが、知識をどうやって生かしてゆくのかということは語彙教育の基礎的な目的として、教科書でもっとしっかりと取り扱うべきではないか。

このように、『学習指導要領』『国語教科書』のそれぞれ記述から問題点を指摘してきたが、今まで述べてきた事柄をまとめると次のようになる。語彙指導の目的として、語彙量を増やすことだけに重点を置くのではなく、その知識をどのように活用してゆくかということと述べてきたが現状からは、辞書学習は身につけた語彙をいかに活用してゆくかということより、語彙量を増やすということに重点を置いているようだ。

3. 語彙指導の実践

3.1 アンケート調査

本論では、小学校における辞書を使った語彙指導の方法論的研究を行っていく。そこで、実際に児童は語彙をどのように理解しているのかということアンケート調査した。

このアンケートの結果をまとめ、問題点を指摘し、語彙指導が子どもたちにとって辞書的な意味をとるということだけに偏りがちにならないように、どのような語彙指導が望ましいか考えていく。

アンケートの目的は、分からない語彙がでてきた時、語彙の持ついくつかの意味の中から、自分の読んでいる文脈にいちばん適している意味を選ぶことができる能力を子供たちはどのくらい身につけているのか、ということ把握するという事である。アンケートの方法は辞書学習が初めて行われる小学校4年生を対象とした。使用した文章は4年生の国語教科書である光村図書「国語4上かがやき」から、説明文の「カプトガニを守る」(土屋圭示 著)を選んだ。その理由は、子供たちが教科書で「国語辞典の使い方」を学習してから初めて学習する説明文であり、国語辞典を意識して学習することができないのではないかと考えたからである。そして、文中の語句の持つ意味を子供たちに2~4の選択肢の中から選択してもらった。

アンケート調査用紙

1、次の文を読んで下さい。

カプトガニを守る

土屋 圭示

カプトガニは、北アメリカの東海岸と、アジアの一部にしか住んでいない、①めずらしい動物です。日本では、瀬戸内海の一部や九州北部などに見られます。全長およそ60センチメートル、②するどい③つるぎのようなしっぽをもち、③いかめしいかぶのような頭をしています。

カプトガニは、実は、二億年もの昔から、ほとんど形をかえることもなく生き続けてきた動物です。なぜ、そんなにも長い間生き続けることができたのでしょうか。

第一の理由は、海の底のどろろの中で④ひっそりと生活してきたことです。そのため、ときにおそわれることが少なく、気候の大きな変化にも、えいきょうを受けなくてすんだのです。

第二の理由は、食べ物が少なくすむということです。何も食べなくても、半年以上もどろろの中で生きていられるのです。

第三の理由は、たまごを数百こずつ分散して産むことです。そのため、たまごがぜんめつする心配がありません。

このような⑤とくちょうをもつカプトガニも、今では、ずいぶん少なくなりました。海がよごれ、海岸がうめ立てられ、カプトガニのすみかが⑥うばわれてきたからです。

そこで、カプトガニを守る運動が、岡山県笠岡市など、各地で進められるようになりました。カプトガニを守ることは、自然を守り、わたしたちのくらしを⑦守ることにつなが

るのです。

2、①～⑦の言葉の意味をえらんで、番号に○をしてください。

- ① めずらしい 1めったにない。まれだ。例このように大きい花はめずらしい。
2ひさしぶりだ。
3ふつうとかわっている。例海でめずらしい魚をつった。
- ② するどい 1先がとがっている。例タカやワシのなかまの鳥のくちばしはするどい。
2よく切れる。例するどいナイフ。
3いきおいがはげしい。例するどいこうげき。
4あたまの働きや感覚(かんかく)などがすぐれている。例するどいものの方。
- ③ いかめしい 1近よりにくい感じをあたえるほど、おもおもしろく、きびしそうだ。
例いかめしい顔つき。
2嚴重である。例兵士がいかめしく門を守っている。
3おごそかな様子。立派できりつとしている様子。例城にはいかめしい門番が立っていました。
4おそろしくて、近よりにくい。例お寺にはいかめしい顔の像が立っている。
- ④ ひっそり 1もの音がなく、しんとして静か。例林の中はひっそりとしていた。
2ひそかに。例森の中でひっそりとくらす。
3めだたない様子。
4しずかで、さびしい様子。例誰もいないので、家の中がひっそりとしている。
- ⑤ とくちょう 1とくべつにすぐれているところ。(特長)
2ほかのものにくらべて、特にめだつところ。(特徴)
- ⑥ うぼう 1人のものをわりやり取る。例兄は弟のボールをうばった。
2人の心や注意を強くひきつける。例色の美しさに目をうばわれる。
- ⑦ 守る 1他からの害をうけないようにする。例子どもを事故から守る。
2したがう。例きそくを守る。

これで、質問は終わりです。ありがとうございました。

3.2 調査項目の選定理由

引用部分は甲斐睦朗(1991)『語句に着目した読み方指導 6小学校3・4年 説明文教材』(明治図書)。

《語句》①めずらしい

《選んだ理由》

『めずらしい』には、カプトガニに対して、貴重であり、不思議であり、興味を引きつけられ、大事に守っていきたいと願っている筆者の気持ちが込められている」語句だといえる。また、学習指導書の記述から、これは段落①の要点である「カプトガニは珍しい動物だ。」ということに深く関わる言葉であるので子供たちにはしっかりと意味を理解してもらいたいと考えた。

《語句》②するどい

《選んだ理由》

「するどい」にはカプトガニのもつ特徴を表す意味が込められている。そして、その次に出てくる「いかめしい」という言葉とともにカプトガニの外観を表現していると考えられる。また、辞書の意味記述を見ると「するどい」には「先がとがっている」「よく切れる」「いきおいがはげしい」「頭の感覚がすぐれている」といった意味があり、ここで意味を取り違えると、カプトガニの印象が変わってしまうのではないかと考えたので、意味をしっかりと理解させたいと考えた。

《語句》③いかめしい

《選んだ理由》

「いかめしい」にはカプトガニの姿を一言で現すという大切な役割がある。これから、このカプトガニについて考えようとしている子供たちにとって、この意味をしっかりと捉えることは、よりイメージを膨らませて授業に取り組む事ができるのではないだろうか。

また、辞書の意味記述を見ても、「近寄りにくい感じがするほど、おもおもしろく、きびしそうだ」「厳重である」「厳かな様子、立派な様子」「おそろしくて、近寄りにくい」といったように、意味に幅があると考えられる。子供たちがこれらの意味の中から、文中の語句に一番適した意味を考えるのは難しいのではないかと考えた。

《語句》④ひっそり

《選んだ理由》

「ひっそり」はカプトガニが2億年もの長い間生活してきた状況を表している。なぜそんなに長い間生き続けることができたのかという問いに対して、イメージとして生き続けてきた様子を思い浮かべることができる語句だと思う。学習指導書によると、「ひっそり」には静かに事をする様子と書かれている。これは辞書の記述を見ても、「物音がなく、しんと静か」「ひそかに」「めだたない様子」「しずかで、さびしい様子」といったように意味が似通っているので、大変わかりにくいのではないと思う。そこで、子供たちにイメージを持ってもらうためにも、この語句の意味をしっかりと押さえておくことは大切なのではないかと考えた。

《語句》⑤とくちよう

《選んだ理由》

「とくちよう」には2つの意味がある。1つは「特徴」もう1つは「特長」である。教科書の本文にはひらがなで記述されているので、子供たちは文字を見て意味の違いを理解することはできない。本文を通して読んだときに、どちらの意味が適しているのか自分で考えなければならない。

「特徴」には「他のものとくらべてとくにめだつところ」、「特長」には「とくべつにすぐれているところ」とそれぞれ意味があるが、この本文ではカプトガニが2億年もの長い間生き続けてきたのはなぜかという問いに対して、カプトガニの性質について解説をしている部分から、「とくちよう」についてどちらの意味が正しいのか判断することができるだろうと思う。

《語句》⑥うぼう

《選んだ理由》

「うぼう」という語句は人間とカプトガニの関係を表現している。本文ではカプトガニが2億年もの長い間生き続けていたという事実を述べ、カプトガニの持つ生命力の強さや、特有の性質を紹介している。しかし最後では、今カプトガニがおかれている現状が述べられており、そこには

人間の力によってすみかが奪われてきたという事実が書かれている。「うぼう」という語句は、今まで述べてきた事柄から転換をはかる、重要な語句ではないかと考えた。

《語句》⑦守る
《選んだ理由》

「まもる」はこの本文の題名にも使われている。そして、まとめの段落での重要語句だと考えられ、学習指導書の記述には「筆者の主張(題名とつながっていく)」とある。「守るの辞書の意味を捉えさせるだけでなく、具体的内容を考えさせ、本文の内容と照らしあわせて捉えさせたい。」また、「『守る』には、これ以上減らさないという受動的な内容にとどまらず、また環境改善のような間接的行動だけでなく、直接的能動的な行動も含んでいる。」

また、辞書の意味記述を見ると、「他からの害をうけないようにする」「したがう」といった、異なる2つの意味を持っていることが分かる。本文では自然を守り、自分たちのくらしも守りたいという気持ちを最後に述べているので、「まもる」の意味をしっかりと捉えておくことが大切だと考えた。

3.3 学習国語辞典における記述

実際の学習国語辞典には、どのように語句が記述されているのかということを見ていく。使用する学習国語辞典は、5社の学習国語辞典である。記述を調べる語句もアンケートで使用した7つの語句とする。

使用する学習国語辞典

- 教育同人社『新版小学国語辞典』……………『同人社』
- 小学館『例解学習国語辞典』……………『例解』
- Benesse『チャレンジ 小学国語辞典』……『チャレンジ』
- 講談社『学習新国語辞典』……………『学国』
- 三省堂『小学国語辞典』……………『小国』

辞書を選んだ理由

本論では、以上の5社の学習国語辞典を使用することにした。その理由として、「教育同人社」の学習国語辞典は、第3章で行ったアンケート対象校で使用しているものであったために本論で使用することにし、その他の学習国語辞典はとくに代表的な出版社の辞典を使用することにした。

「①めずらしい」

『同人社』	めずらしい【珍しい】①めったにない。使このように大きい花はめずらしい。②ひさしぶりだ。使「あら、めずらしい。」
『例解』	めずらし・い【珍しい】 ¹¹ 形①めったにない。まれた。例めずらしくねぼうした。②ふつうとかわっている。目新しい。例海でめずらしい魚をつつた。活用めずらしかろう・めずらしかった・めずらしくなる・めずらしいとき・めずらしければ 関連(…の)めずらしさ④めずらしがる⑤めずらしげ形動
『チャレンジ』	めずらし・い【珍しい】形容詞①めったにない。まれた。⑥こんなに雪がつもったのは珍しい。②ふつうとはかわっていて、目新しく思われる。⑦六角形の切手とは珍しい。
『学国』	めずらし・い【珍しい】形①めったにない。目新しい。例これはめずらしいこん虫だ。②ふつうとちがっている。例めずらしくテストが満点(まん)だった。
『小国』	めずらしい【珍しい】めったにない。ふつうと変(か)わっている。例珍しい動物。

「②するどい」

『同人社』	するどい【鋭い】①先がとがっている。例タカやワシのなかまの鳥のくちばしはするどい。②よく切れる。例するどいナイフ。③いきおいがはげしい。例するどい攻撃(こうげき)。④頭の働きや感覚(かんかく)などがすぐれている。例するどいもの見方。対にぶい。
『例解』	するどい【鋭い】 ^さ 形①先がとがっている。例タカのするどいくちばし。②刃物(やいば)の切れ味がよい。例刃をといでするどくする。対にぶい。③ちえや感じ方などがすぐれている。例頭のはたらきがするどい。耳がするどい。対にぶい。④いきおいがはげしい。例するどい攻撃(こうげき)。⑤きつくておそろしい感じがする。例目つきがするどい。⑥声や音がたいへん高く強い。例ジェット機の発進音はするどい。⑦光のかがやきが強い。例ライトがするどくて目がくらむ。対にぶい。活用するどからう・するどかつた・するどくなる・するどいとき・するどければ 関連(…の)するどさ④
『チャレンジ』	するどい【鋭い】形容詞①先が細くとがっている。②鋭いばらのとげ。②よく切れる。③鋭い刀。③いきおいがはげしく、おそろしい。④鋭い目つき。④すぐれている。⑤頭のはたらきが鋭い。対①～④鈍にぶい。
『学国』	するどい【鋭い】形①先がとがって細い。例するどい矢じり。②よく切れる。例するどいナイフ。③勢(いきお)いが激(はげ)しい。手厳(てび)しい。例するどい言葉。④頭がいい。例あ的人是するどい。対にぶい。
『小国』	するどい【鋭い】①とがっていて、つきささる感じである。例鋭いとげ。②よく切れる。例鋭い小刀。③勢(いきお)いがはげしい。例鋭い目つきをする。④すぐれている。例鋭い頭脳(ずのう)の持ち主。×(反対語)にぶい。

「③いかめしい」

『同人社』	いかめしい 近よりにくい感じをあたえるほど、おもおもしろく、きびしそうだ。例いかめしい顔つき。
『例解』	いかめしい【厳しい】 ^い 形厳きびしそうで、こわいようす。例いかめしい顔つき。活用いかめしかろう・いかめしかつた・いかめしくなる・いかめしいひと・いかめしければ 関連(…の)いかめしさ④ 厳めしげ形動
『チャレンジ』	いかめしい形容詞おそろしくて近よりにくい。④お寺にはいかめしい顔の仁王像(におうざう)がある。
『学国』	いかめしい【厳めしい】形①おごそかな様子。立派(りっぱ)で、きりつとしている様子。例城(しろ)には、いかめしい番兵(ばんべい)が立っていました。②激(はげ)しい。厳(きび)しい。例先生がいかめしい顔つきで入ってこられた。
『小国』	いかめしい ①そばへよるのがおそろしいような感じがする。例えんま様はいかめしい顔をしている。②厳重(げんじゅう)である。例兵士(へいし)がいかにめしく門(かど)を守(まも)っている。

「④ひっそり」

『同人社』	ひっそりと(同人社の見出し語には「ひっそり」は無く、「ひっそりと」になっている。) ①もの音がなく、しんとして静(しず)かに。 <u>使</u> 林の中は、ひっそりとしていた。②ひそかに。 <u>使</u> 山の中でひっそりとくらす。
『例解』	ひっそり ^ひ 、 <u>副</u> ・する①しずかで、物音一つしないようす。 <u>例</u> 夜の学校はひっそりとしている。②しずかに、目立たないようす。 <u>例</u> 一人でひっそりくらししている。
『チャレンジ』	ひっそり【と】 <u>副詞</u> <u>動詞</u> ①しずかでさびしいようす。㊦だれもいないので家の中でひっそりとしている。②めだたないようす。ひそかに。㊦一人だけで、ひっそりとくらす。
『学国』	ひっそり(と) <u>副</u> <u>動する</u> ①しんとして静(しず)かな様子。 <u>例</u> ひっそりとした村。②静かで人目につかない様子。 <u>例</u> 山の中でひっそりと暮(く)らす。
『小国』	ひっそり ①静(しず)かでさびしい様子。 <u>例</u> ひっそり(と)した家。②めだたないようす。 <u>例</u> ひっそり(と)した人。

「⑤とくちよう」

『同人社』	とくちよう【 <u>特長</u> 】とくべつにすぐれているところ。 <u>関</u> 長所・とりえ・利点(りてん) とくちよう【 <u>特徴</u> 】ほかのものとくらべてとくに目立つところ。 <u>関</u> 特性(とくせい)・特質。 とくちよう(特徴・特長)の使い分け 特徴は、ほかのものより、とくにめだつところ。特長は、ほかのものより、とくにすぐれているところ。 <u>使</u> あの人のしゃべり方は、とても特徴がある。この辞典(じてん)の特長は、にている言葉の使い分けかたがよく分かるところだ。
『例解』	とくちよう【 <u>特長</u> 】 ^{とく} <u>名</u> ほかのものより、とくにすぐれている点。 <u>例</u> 特長を生かす。 とくちよう【 <u>特徴</u> 】 ^{とく} <u>名</u> ほかのものとちがう点。とくに目立つところ。 <u>類</u> 特色。 <u>例</u> シカのおすの特ちようは、つがあることだ。
『チャレンジ』	とくちよう【 <u>特長</u> 】 <u>名詞</u> ほかのものよりも、とくにすぐれているところ。 ㊦このくつの特長は、じょうぶで長持ちすることだ。⇒ <u>使い分け</u> とくちよう【 <u>特徴</u> 】 <u>名詞</u> ほかのものにくらべてとくに目だつところ。㊦キリンは首が長いのが特徴だ。 <u>使い分け</u> 《 <u>特長</u> ・ <u>特長</u> 》 特長はほかのものよりすぐれているところ。特別(とくべつ)の長所(ちやうじょ)のこと。「新製品(しんせいひん)の特長(とくちやう)を説明(せつめい)する/彼(か)の特長(とくちやう)をひき出す」 特徴(とくちやう)はよい悪い(よひわるい)に関係(かんけい)なく、ほかのものとちがって、目だつ点(ちやうてん)。変わっているところ。「ある人物(じんぶつ)の特徴(とくちやう)をつかむ」
『学国』	とくちよう【 <u>特長</u> 】 <u>名</u> ほかのものよりも、特にすぐれているところ。 <u>例</u> このくつは、じょうぶなのがいちばんの特長(とくちやう)です。㊦特色 とくちよう【 <u>特徴</u> 】 <u>名</u> ほかのものとちがって特に目立つところ。 <u>例</u> 目

	<p>の大きいのが、あの人の特徴です。㊦特性 (とくせい)。</p> <p>使い分けけどうする○とくちよう【特長・特徴】</p> <p>○「長」は、すぐれているという意味。「特長」は、ほかと比(くら)べて特にすぐれていること。例自分の特長を生かす。</p> <p>○「徴」はあらわれる、目立つという意味。「特徴」は、ほかのものより特に目立つこと。例顔の特徴はどんなところですか。先生の歩き方には特徴がある。</p>
『小国』	<p>とくちよう【特長】ほかのものよりも特にすぐれているところ。長所。</p> <p>例この本の特長は印刷(いんさつ)がきれいなことだ。</p> <p>とくちよう【特徴】ほかのものに比(くら)べて、特に目だつところ。</p> <p>例姉(あね)の字は、右かたが下(さ)がるという特徴がある。</p>

「㊦ うばう」

『同人社』	<p>うばう【奪う】①人のものをむりやり取る。㊦あたえる。使兄は弟のボールをうばった。②人の心や注意を強くひきつける。使色の美しさに目をうばわれる。関あげる・まきあげる・ふんだくる・さらう・ひきつける・かちとる。</p>
『例解』	<p>うばう【奪う】^奪動①人のものをむりに取る。例権利をうばう。②心や目を引きつける。例目をうばわれる美しさ。活用うばわない・うばいます・うばった・うばうとき・うばえば・うばおう 関連うばえる(うばうことができる)㊦</p>
『チャレンジ』	<p>うばう【奪う】動詞①むりに取りあげる。㊦どろぼうが金を奪ってにげた/大地しんは多くの人の命を奪った。②人の目や心をひきつける。㊦その絵の美しさは、人々の目を奪った。対①与あたえる。</p>
『学国』	<p>うばう【奪う】動①人のものを無理(むり)に取り上げる。対あたえる㊦。②心を引き付(つ)ける。例目をうばうほどの美しい景色(けしき)だ。</p>
『小国』	<p>うばう【奪う】①むりに取り上げる。ぬすむ。②なくさせる。例熱(ねつ)をうばう。㊦あたえる。</p>

「㊦ 守る」

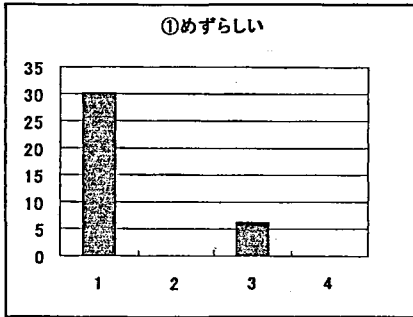
『同人社』	<p>まもる【守る】①他からの害(がい)を受けないようにする。使子供を事故(じこ)から守る。②しかがう。使きそくを守る。⇒しゅ【守】</p>
『例解』	<p>まもる【守る】^守動 害を受けないようにふせぐ。例身を守る。自然を守る。対攻せめる。②やくそくや決まりにそむかずしたがう。例規則きそくを守る。対破やぶる。活用守らない・守ります・守った・守るとき・守れば・守ろう 関連守れる(まもることができる)㊦ (...の守り)㊦⇒しゅ(守)</p>
『チャレンジ』	<p>まもる【守る】動詞①害(がい)を受けないようにふせぐ。㊦火事から家を守る。②決めたことにしたがう。㊦法律ほうりつを守る。対①攻せめる。</p>
『学国』	<p>まもる【守る】動①敵がせめてきたり、よそから害を受けたりするのを防(ふせ)ぐ。(名守り)例城(しろ)を守る。対せ(攻)める。②決められたことを、そのとおりにする。例規則(きそく)を守る。</p>
『小国』	<p>まもる【守る】①害(がい)を受けないように番をする。(防(ふせ)ぐ)。</p>

例留守(るす)〔じん地)を守る。×(反対語)せめる。②決められたと
 おりにする。例規則(きそく)を守る。⇒シュ〔守〕。

3.4 調査結果

ここでは、実際に行ったアンケートの集計を行い、実態例を紹介しながら結果の分析とその結果に対する考察を行っていきたい。アンケートは小学校4年生36名に行ったもので、グラフはひとつの語句につき1つずつ表記した。

3.4.1 ①めずらしい



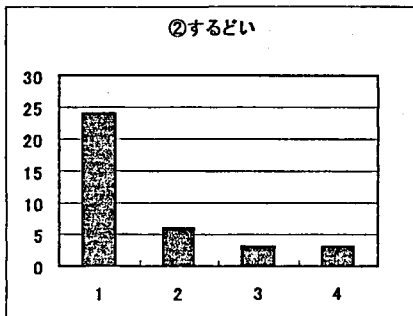
- 1.めったにない。まれた。
- 2.ひさしぶりだ。
- 3.ふつうとかわっている。

本文の中では「カプトガニは、北アメリカの東海岸とアジアの一部にしか住んでいない」と書かれている。このことから分かるように、カプトガニは、めったに見られない貴重な動物であると、筆者は述べている。ふつうとかわっていると述べているわけではないので、「めったにない。まれた。」を選択することが良いと考えられる。実際のアンケートの結果を見ても、30名の児童が1を選択している。しかし、6名の児童が3の「ふつうとかわっている。」を選択している。

それは、「①めずらしい」の1~3の選択肢を見ると、2の「ひさしぶりだ」以外の二つは、意味がとてもよく似ている事から生じたのではないだろうか。どちらかという、1の「めったにない。まれた。」という方が意味が強く感じられ、3の「ふつうとかわっている。」の方は意味が、比較的強くは感じられない。しかし、子供たちにはこの少しの違いを理解し、どちらか判断することは難しかったのではないだろうか。

また、このように文章自体から判断したり、筆者の述べたいことを考えながら判断することが一番望ましいと思うが、実際の結果から考察すると、子供たちには難しいことなのかもしれない。

3.4.2 ②するどい

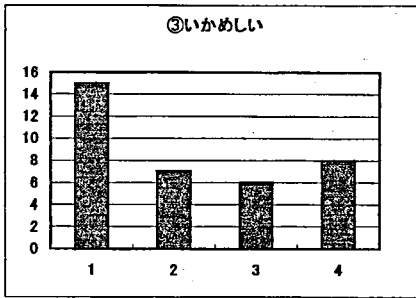


1. 先がとがっている。
2. よく切れる。
3. いきおいがはげしい。
4. あたまの働きや感覚などがすぐれている。

本文の中では1の「先がとがっている」といった意味で「するどい」が使われていると考えられる。ここでは24人の児童が1を選択している。しかし、2の「よく切れる」を選択した児童が6人いる。これは、文を読んだときに「するどい」の後に「つるぎのようなしっぽもち」と書かれているので、「つるぎ」から「よく切れる」が連想されたのではないかと考えられる。

結果を見ると3「いきおいがはげしい」4「あたまの感覚などがすぐれている」を選択した児童がともに3人ずついる。これは、カブトガニという動物のイメージを子供たちの中で作り上げていたことから、カブトガニの気性等を自分たちなりに考え、3と4を選択したのではないかと考えられる。しかし、「するどい」とはカブトガニの気性ではなく、カブトガニの外観を表しているものなので、本文を読み進めながら子供たちが「するどい」はカブトガニの外観のイメージを表している語彙であるとことを理解するように指導しなければならない。

3.4.3③いかめしい

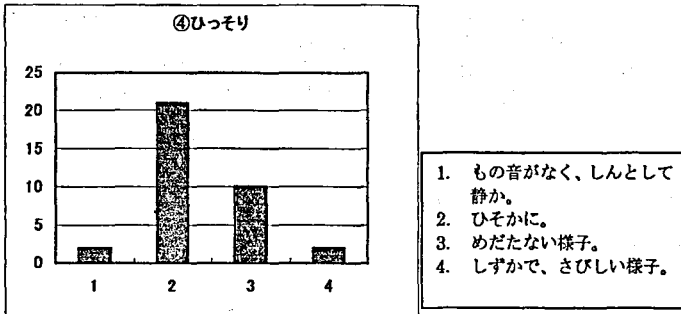


- 1 近よりにくい感じをあたえるほどおもおもしろく、きびしそうだ。
 2 嚴重である。
 3 おごそかな様子。立派できりっとしている様子。
 4 おそろしくて、近よりにくい。

本文では、「いかめしいかぶのような……」というように「いかめしい」という語句を使用している。このことから、1の意味か3の意味が適していると考えることができる。どちらかというところ、3の「立派できりっとしている様子」という意味の方が適している。3はカブトガニの名前の由来でもある「カブト」をより良く表現することができるのではないだろうか。この「いかめしい」という語句によって、子供たちの中に重厚で立派なカブトを身にまとったカブトガニがより強くイメージされるだろう。「カブト」は「恐ろしい」というのではなく、立派できりっという表現を使ったほうがよい。

アンケートの結果を見ると、1を選択している児童が15名と一番多く、残りはほとんど同数の児童が2～4の選択肢を選んでいる。今回のアンケートでは、この「いかめしい」という語句は、特に人数の散らばり方に差がなかった。このことから、意味的に非常に似ているので子供たちが選択しにくかったと考えることができる。しかし、2の「嚴重である」という意味はこの文章には当てはまるとは考えられない。次に4をみると、だいたい1と意味が似ていることが分かる。そこで、子供たちは1と3と4の意味の間で迷っていたと考えられる。

3.4.4④ひっそり



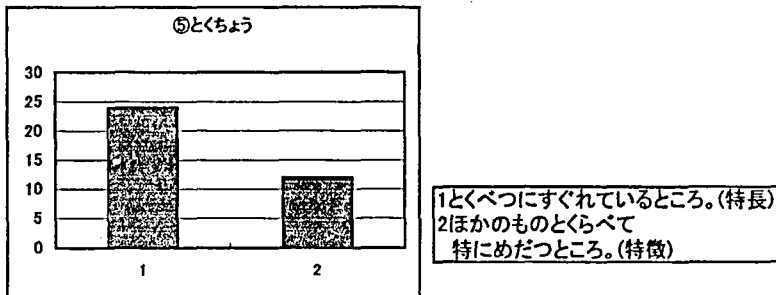
本文では「ひっそり」はカプトガニが生活している様子を表す語句として使用されている。その前に、カプトガニはなぜ、2億年もの長い間生き続けることができたのかと問題提示がされており、カプトガニの生活の様子を表す「ひっそり」という語句はこの問いに答えている部分の、キーワードだと考えられる。

選択肢を見ると3の選択肢が一番本文に適している。1は状況を表す「ひっそり」であり、4は様子を表現しているが、さびしい様子ではないので、本文には適さない。実際のアンケート結果を見ても、2を選択した児童は21名、3を選択した児童は10名となっている。ほとんどの子供たちが2、3の意味を選択していることが分かる。

「ひっそり」については、選択肢に4社の学習国語辞典の記述を使ったが、比較してみると違いがあまりはっきりと現れていないので子供たちには分かりづらかったのではないかと思う。実際に私が判断するときもどのように基準を定めて判断して良いのかは分かり分らなかった。私は3が一番適していると思ったが、その理由は、カプトガニの生活している様子を表す意味として、めだたない様子という記述が分かりやすく、本文に一番適していると思ったからである。

しかし、アンケートの結果としては、選択肢が似通っているということから子供たちには選択しづらく、結果も分かりづらいものになってしまった。

3.4.5⑤とくちょう



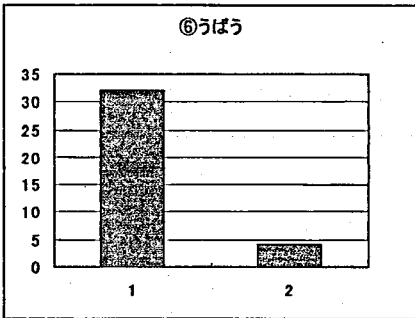
本文では「とくちょう」という語句は、2の「ほかのものとからべて、特にめだつところ。」という意味で使われている。この2つは同音異義語なので、子供たちにも比較的分かりやすいだろうと思った。しかし、アンケートの結果をみても1を選んでる児童の方が多く、24人もいた。それに対し、2を選んだ児童は12人と半分しかいなかったのである。

本文ではこの語句はひらがなで書かれているので、漢字を見て意味を判断することはできない。

そこで、本文を読んで意味を解釈することになる。本文では、カプトガニが2億年もの長い間生き続けることができた理由を説明しているが、それはカプトガニの特別に優れているところではなく、他のものと同く比べて特にめだつところだと表現している。

他のものにはない、珍しい性質ということで「特徴」のほうが適していると考えられるが、思ったよりも子供たちには「特徴」と「特長」の2つはわかりにくい表現であったようだ。

3.4.6⑥うばう



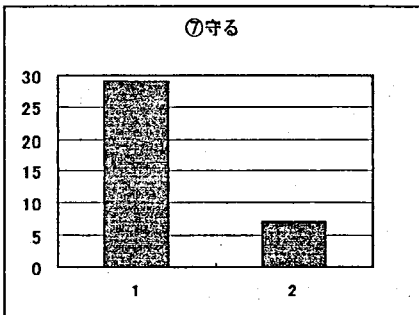
1. 人のものをむりやり取る。
2. 人の心や注意を強く引きつける。

「うばう」という語句は本文では1の「人のものをむりやり取る。」という意味で使われている。アンケートの結果を見ても、1を選んだ児童は32人、2を選んだ児童は4人とほとんどの子供たちが1を選択していることが分かる。

この「うばう」という語句の2つの意味のうち、私たちが日常よく使うのは1の「人のものをむりやり取る。」という方ではないだろうか。2の「人の心や注意を強く引きつける。」という用法は、あまり日常会話では使うことはなく、どちらかという文章に使う方が多い。また、2の意味を使った用法は、小学生には比較的難しいものかもしれない。そのようなことから、ごく自然に1の意味を選択することができたのではないだろうか。

また、教科書の本文を読み進めてゆくと、カプトガニがどんどん減ってきていることや、海岸がうめたてられ、人の手によって、すみかが無くなってきているということが書かれているので、意味的にも1の方を選択しやすかったのではないだろうか。また、この2つの選択肢は意味に幅があり、全く違った意味をもっているので今までの選択肢にくらべると、分かりやすいものであったと思う。

3.4.7⑦守る



1. 他からの害を受けないようにする。
2. したがう。

「守る」という語句は、本文では1の「他からの害をうけないようにする。」という意味で使われている。この語句も選択肢の2つに意味の幅があり、違いがとてもしっかりやすい。アンケートの結果では、29人の児童が1を選択し、7人の児童が2を選択していることから、子供たちにも分かりやすいものだったのではないと思う。

本文を読み、その内容から意味を選択するということであるので、⑥の「うぼう」で1「人のものをわりやり取る。」という意味を選択できていた児童は、「守る」では1を選択する事が出来ていたのではないだろうか。本文の流れでは、人間にすみかを奪われたカブトガニがどんどん減ってきているので、それらを守らなければいけないというものである。つまり、人間からの害を受けないようにするというのである。

また、2を選択した児童は、「カブトガニを守るという決まりに、したがわなければならない」という意味で解釈したのではないだろうか。

4. 語彙指導の課題と改善

語彙指導の目的として一番多くあげられることは「語彙の拡充」であるが、語彙量を多くしたとしてもそれらの語彙を目的に添って使うことができれば意味がない。また、語句の中には多数の意味を持つものもある。それらを自分の判断で使いこなせて初めてその語句を自分ものにする事ができるということの本論で述べてきた。

私は語彙指導の方法の1つとして、辞書を使った指導はどのように行うべきかということを通して実際に子供たちが普段使っている学習国語辞典をどのように理解しているのかということアンケートなどを行って調査した。学習国語辞典には当然いくつもの意味が載っている。それらを見つけたときに、その中から一番適した意味を自分で判断することができるのだろうか、というのが私の疑問であった。辞書を引く学習をしても、一番適した意味を選ぶにはどうしたら良いかという学習はあまり行われていないように思ったからである。しかし普段の授業において、教科書で分からない語句が出てきたときに当然学習国語辞典を使うので、語彙指導にとって学習国語辞典はとても大切な役目を果たしていると言えるのである。

学習国語辞典は小学生を対象に作られているものなので、子供たちが理解できる範囲の語句を使用し、意味記述も分かりやすいものでなければならない。また例文についても、子供たちの辞書学習を補助する役目を果たすように、より簡潔で理解しやすいものでなければならない。

そのように、学習国語辞典が子供たちにとって分かりやすいものであるとともに、教師の指導はどのようにしてゆくべきなのかということも考えていかなければならない。語彙指導の中で行われる辞書学習はただ単に辞書の引き方を知って、その中に書かれている意味をノートに写して覚えるだけで終わってしまっただけではいけない。そのために辞書を使った語彙指導の目的をしっかりと定めて、目的に添って行われるべきではないだろうか。

そこで、辞書を使った語彙指導の目的を定めたい。辞書学習も語彙指導と同じように、語彙量を増やすためや、辞書の引き方を知ることだけで終わらせるのではなく、そこから学習をさらに発展させていけるような目的にしたい。辞書学習の最大の目的は、辞書を使用できるようにすることであるが、自分が知りたい語句の意味にはどのようなものがあり、その中で今自分が必要としている意味にはどれが一番適しているのかということや文章の流れから判断する力も共に付けていくことが大切である。

たいていの場合、何らかの文章を読み、その中の語句の意味を調べるために辞書を使用する。初めから語句は単独で存在しているものではないので、その語句の意味もその文章に適したものでなければならない。子供たちが辞書を開いたときに、辞書の中の語句の意味と文章の中で使われている語句の意味がちゃんとつながりを持っているようにしたい。そこで、辞書を使って語彙指導を行ってゆくための目的を次のように考えた。

「分からない語句が出てきたとき、必要に応じて辞書を使えるように使い方を知らずと共に、書かれている意味の中から文章に適している意味を選別することができる。」

これは、まず第一の目的として辞書の使い方を知るといことである。その次に、いくつかの意味が出てきたときに、自分が必要としている意味にはどれが一番適しているのかということをも自分の力で判断できるようにする力を付ける、という事を目標としている。その2つを辞書を使った語彙指導では指導していきたい。

そのためには、まず教師が学習国語辞典を選定する必要も出てくるだろう。どの学習国語辞典が一番多く意味が載っているのか、例文が分かりやすいのかなど、選定する項目はいくつも出てくる。また、教科書と関連させて学習国語辞典を選定すると、授業で一番使いやすい辞書はどれかということも重要な選定理由としてあげられる。このように辞書を使った語彙指導を行うためにはいくつもの準備が必要になってくる。

最後に、辞書を使った語彙指導の方法について、子供たちの実態や学習国語辞典の現状を含めながら考えてみたい。実際の教科書の「カプトガニを守る」の説明文で使用されている語句の中でアンケートの結果から、子供たちの意見が一番分かれた「いかめしい」という語句を取り上げて具体的な指導法について考えてみたい。

「いかめしい」という語句は実際の文章の中では「いかめしいかぶとのような頭をしています。」というように使われている。そこで辞書を引いてみると、辞書の中には次のように書かれている。

「1 近よりにくいほど、おもおもしろく、きびしそうだ。2 厳重である。3 おごそかな様子。立派できりつとしている様子。4 おそろしくて、近よりにくい。」この4つである。アンケートの結果では、1の意味を選んだ子供たちが一番多かったが、残りの3つの意味を選んだ子供たちの人数も多かった。このような場面ではどのように指導してゆくのがよいだろうか。

まず、もう一度文章を読んでみる。文章の中から出てきた語句であるので、その前後の文脈を読み、語句がどのような場面でどのように使われていたのか確認してみる。そこから意味をいくつか推測してみると良いだろう。自分で推測した意味と辞書で調べた意味を照らし合わせ、前後の文脈から一番適している意味を1つ選ぶのがよいだろう。「いかめしい」の場合、文脈ではカプトガニの「カプト」の様子をあらわす為はこの語句を使用している。意味をみてみると、どの意味も状態を表現するのに適しているが、1の「近よりにくいほど、おもおもしろく、きびしそうだ」というのはカプトを表現するには適していない。カプトが重厚で重そうであるということは分かるが、おもおもしろく近よりがたい感じではない。また、きびしそうだという表現も適していないだろう。しかし、アンケートでこの意味を選んだ子供たちは15人と一番の多かった。なぜ子供たちがこの意味を選んだのかということを見ると、子供たちのもつカプトのイメージが関係しているのではないだろうか。そこで実際にカプトを見てみることも良い。子供たちにどうしてこの意味を選んだのかということも聞いてみるのも1つの方法ではないだろうか。子供たちは自分たちなりの考え方で意味を選んでいるので、その考え方も尊重しながら共に意味を考えてゆくのが良いだろう。また、作者の気持ちを考えてみるのも良い。「作者はどんな気持ちでこの言葉を使ったのかな」「みんなに何を伝えたかったのかな」という疑問を考えることで、語句の意味をより深く考えることができるのではないだろうか。

次に2を見てみると、「厳重である」という意味が書かれている。これは、「カプト」の様子を表すものとしては全く当てはまらない。しかし、この意味を選んだ子供たちは7人もいたのである。この子供たちにもどうしてこの意味を選んだのか聞き、そこで、間違っているところを正すのではなく、どのように意味を選んだらよいのか、文脈に適しているかどうか、自分たちが選んだ意味は他にはどのようなときに使うのかなどのお話をし、意味の選び方が分かるように指導したい。

次に3を見てみると、「おごそかな様子。立派できりつとしている様子」と書かれている。これはこの文脈が一番適していると思われる。しかし、意味記述の中で使われている「おごそか」という意味が子供たちには難しかったのかもしれない。その後に書かれている「立派できりつとしている」という意味は分かりやすいが、もし子供たちが意味記述自体の意味が分からなかったのだとしたら、この意味を選ぶことはあまりないだろう。実際にアンケートの結果を見ても、この意味を選んだのは6人と一番少なかったのである。子供たちが、書かれている意味をしっかりと理解しているのかということは一歩大切なことである。書かれていることが分からずに、なんと

なく意味を選んでしまっているようなことがないように、語彙指導を行っていきたい。そこで、意味記述を子供たちが理解できているかどうか、1つ1つ吟味しながら辞書を読み進めてゆくの
が良いだろう。意味を調べたときに分からない語句が出てきたら、またその語句を辞書で調べる
などして、しっかりと理解できるようにしたい。

最後の4を見てみると、ここでは「おそろしくて、近よりにくい」という意味が書かれている。
「おそろしい」という表現はこの文脈には適していない。たしかにカプトガニは見た目は恐ろし
い感じがするのかもしれないが、ここでは「おそろしい」という言葉でカプトを表現したいので
はなく、「立派」という言葉で表現した方が文脈に適している。

このように、意味の1つ1つをみながら理解しながら文脈に沿ったものを選んでゆくという過程
を辞書を使った語彙指導では行ってゆくべきだろう。辞書は辞書、教科書は教科書というように
分離しないように心がけたい。

「語彙指導」といっても、語彙に関することだけを指導するのではなく、そこから文章の読み
方、使われている語句に関することなど子供たちに指導することは多くある。語彙を多く知るこ
とは子供たちの学習の中でとても基本的なことである。語彙を多く知ることで、文脈をより豊か
に把握したり表現したりすることができ、学習の範囲がより広がってゆくからである。何度も述
べているように語彙指導は語彙量の拡充だけを目的とするのではなく、語彙を知ることによって表現力
が豊かになるように、ということを目指している。辞書を調べ、その中の意味を覚えることは教
師の支援がなくてもできることだが、語彙をいかに生かすことが出来るかというのは、やはり教
師の支援がなければできないことだろう。そのためにどのように指導すればよいのか、今まで具
体的に述べてきたつもりだが、まだ実際の授業で自分がどのように指導したらよいかということ
は模索しているところである。

最後に、語彙指導を行う上で教師が一番大切にしたい意識というものについて述べたい。それは
「語彙を子供たちの中に位置づける」ということである。一度学んだ語彙を今度は自分の力で、
自分の思いを込めて使えるように指導するということである。それが語彙指導の最終的な目的だ
といえるのではないだろうか。

5.おわりに

今回指導法について考えてみて初めて、指導法というものはいくら考えていてもそれを実行し
て結果を得なければ意味がない、という事を強く感じた。指導は一人でするものではなく、子供
たちがそれを受け止め、教師の気持ちに答えてくれたときに初めて成立するものなのだ。しかし、
自分の指導法を実行したからといってそこで満足せず、いつまでもよりよい指導法について研究
を続けたい。

【参考文献】

甲斐睦朗(1991)『語句に着目した読み方指導 6小学校3・4年 説明文教材』明治図書
児島邦宏解説(1999)『平成 10年 12月告示 小学校学習指導要領』時事通信社
光村図書(1996)『国語四上 かがやき』光村図書
光村図書(1996)『国語学習指導書 4年上かがやき』光村図書
文部省(1999)『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版

【使用辞典】

金田一京助(1999)『例解学習国語辞典 第七版ワイド版』小学館
金田一春彦・林 大・柴田武(1988)『日本語百科大辞典』大修館書店
国語学会(1981)『国語学大辞典』東京堂出版
国語教育研究所(1991)『国語教育研究大辞典』明治図書
柴田武監修(1990)『新版小学国語辞典』教育同人社
田近洵一・井上尚美(1984)『新訂 国語教育指導用語辞典』教育出版

中沢政雄・田近洵一・石黒修(1998)『小学国語辞典』三省堂
日本大辞典刊行会(1974)『日本国語大辞典』小学館
馬淵和夫監修(1998)『学習新国語辞典第三版』講談社
湊吉正監修(1994)『チャレンジ小学国語辞典 第三版』ベネッセコーポレーション